

ギリシア語における V-to-C 移動と小辞の配置

近松 明彦

0. はじめに

本稿が重点的に行うことは、Rivero and Terzi (1995) の議論を紹介することである。第 1 部では特にギリシア語に関する議論にまとをしぼりながら同論考の概要を紹介する（その中では、動詞の移動が主要なテーマである）。第 2 部では古代ギリシア語の小辞の配置について議論したい。ヴァッカーナーゲルの法則や、ドイツ語の verb second などにふれながら、古代ギリシア語の小辞の分析がある意味で統語論と音韻論の接点に位置する課題であることを示す。

第 1 部

1. Rivero and Terzi (1995) の概要

本節以下しばらく、Rivero and Terzi (1995) の議論を大まかに紹介する。ギリシア語（古代ギリシア語、現代ギリシア語、キプロス方言）、スペイン語、セルボ・クロアチア語が主な分析対象となる。同論考では、次のような類型論的区分を提案している：

- (1) (a) クラス I: 命令形の動詞が他と異なる (distinctive) 統辞法を有する。
- (b) クラス II: 命令形の動詞が他と異なる統辞法を持たない。

(Rivero and Terzi (1995: (1)))

クラス I に属する言語は、現代ギリシア語、スペイン語などであり、クラス II には、セルボ・クロアチア語、古代ギリシア語などが属するという。現代のギリシア語キプロス方言は、クラス I とクラス II の混合に見える。命令文の統辞法はクラス I で、接語の配置 (clitic placement) についてはクラス II に近い特性

を示している。本質的にはクラス I であるとされる。

Rivero and Terzi はクラス II をヴァッカーナーゲル言語 (Wackernagel language) とも呼んでいる (Rivero and Terzi (1995:301))。接語の配置 (弱形代名詞や小辞 (particle) の分布を含む) に関して、ヴァッカーナーゲルの法則 (後述) が当てはまる言語であるということらしい。

クラス I の言語の例として次のものが挙げられている :

(2) 現代ギリシア語 (Class I)

a. [命令法－弱形代名詞]

Diavase to! “Read it!” (Rivero and Terzi (1995: (4a)))

b. [弱形代名詞－直説法]

To diavases. “You read it.” (Rivero and Terzi (1995: (4c)))

(2a) のように、現代ギリシア語の命令形動詞は弱形代名詞に先行する位置に現れる。この語順は、動詞がその本来の位置から CP (節に相当) の主要部である C (学説史的にはかつての補文化詞の位置) に向けての移動 (V-to-C 移動) を行うために生じる語順であると Rivero and Terzi は分析している (この分析では、クラス I の言語において、動詞が C にある強い V 素性を認可するとされる)。

では、クラス II の言語の例としては次のものが挙げられる¹⁾ :

(3) 古代ギリシア語 (Class II)

a. [命令法－小辞]

Patakson men, akouson de.
strike.IMP.2S P listen.IMP.2S P

“By all means strike, but listen.” (Plutarch, *Themistocles* II.3.6)

a'. [X－小辞－命令法]

Ta men poiei, ta de mê poiei.
these P do.IMP.2S, these P NEG do.IMP.2S

“Do this, but do not do that.” (Plato, *Protagoras* 325d)

b. [直説法－小辞－否定辞]

Eboulomên men ouk erisein enthade.
wish.IND.1S P NEG contend. INF here

“And I wish(ed) I was not contending here (as I am).”

b'. [X-小辞-否定辞-直説法]

Ego men ouk oida.

I P NEG know.IND.1S

"I, for my part, do not know." (Xenophon, *Cyropaedia*, 1.4.12)

クラス II の言語では、命令形の動詞の統辞法を見るために、接語的要素の配置に注目しなくてはならない。クラス II の言語では、ヴァッカーナーゲル効果の一つの特徴として、接語に類する強勢を欠く語が文頭から数えて二番目の位置に生じることが大きな特徴とされている。(3)においてボールド体で示されている *men* や *de* が小辞であり、二番目に現れている（機能的には談話にかかわる標識。*men ... de ...* は “on the one hand ... on the other hand” と訳される）。命令形の動詞の統辞法に関しては、命令法 (3a-a') であれ、直説法 (3b-b') であれ、動詞は小辞の左にも右にも現れうる。つまり、命令形の動詞の統辞法が他と異なることはない。

2. 接語／小辞の分布とその認可

クラス II については、(3) の *men* や *de* のような接語／小辞 (CL/P と記号化され、W-項目 (W-item) と呼ばれている) が文の二番目の位置に生じるという事実が上記のように知られているが、それが Rivero and Terzi (1995) においてどのように説明されているかを本節では紹介する。

同論考では次のような構造が最初に仮定されている：

(4) $[_{CP} C [_{WP} CL/P [_{W} W YP]]]$ (Rivero and Terzi (1995: (39)))

クラス II の言語における、W-項目(CL/P)の PF-認可の要請が仮定される。それは次のようにまとめられるようなものである：

- (5) i. Spell-out/PF よりも前に W-項目が可視的 (visible) な C の、内部項領域 (internal domain) ((4) では WP の [] の内部の領域に当たる) の中に現れることによって認可されなくてはならない。
- ii. 可視的な C というのは、(a) または (b) のような C である：
- (a) 音韻的内容のある要素 (補文化詞 (complementizer) や動詞 (V))

など) によって占められている。

(b) その指定部が音形を有する (overt) 要素によって占められている。

(5) は Rivero and Terzi (1995:320) をまとめた)

次の (6) のように、動詞が C に移動して、(5iia) によって (5i) の条件を満たすことができる：

(6) $[_{CP} [_C V_i] [_{WP} CL/P] _w [W [_P t_i]]]$ (Rivero and Terzi (1995: (41)))

また、次の(7)のように、句（最大投射。但し、主要部一語だけで句を形成しているケースもある）が C の指定部に移動して、(5iib)によって(5i)の条件を満たすことができる：

(7) $[_{CP} YP_i [_C \emptyset_i] [_{WP} CL/P] _w [W [_P V t_i]]]$ (Rivero and Terzi (1995: (42)))

このように、Rivero and Terzi (1995) のシステムでは、結果的に、接語や小辞などの W-項目 (CL/P) が文の二番目の位置に生じることになると説明される。

第 2 部

3. 接語／小辞に関する問題点

Rivero and Terzi (1995) は、その注 [12] の中で、Taylor による音韻論的接近法 (phonological approach) に触れている²⁾。上の (5) にまとめた Rivero and Terzi (1995) の分析では接語／小辞の認可が統語論的に扱われている上に、Spell-out /PF の前に行われる。それに対して、音韻論的接近法では、小辞が PF 接語化規則 (PF cliticization rule) によって文の第二の位置に移動すると考えているという (Rivero and Terzi (1995: 315n))。

以上、第 1 部から引き続いて、Rivero and Terzi (1995) の議論を概観したが、このような点に関して、Rivero and Terzi (1995) の主張にとって不利な証拠ではないかと筆者に思われるのは、同論考が否定文 (否定命令文) をめぐる現代ギリシア語と古代ギリシア語の相違点を論じるために引用している次の例文であ

る³⁾ :

- (8) Oi de stratêgoi eksêgon men ou,
the P generals lead.out.IND.3P P NEG
sunekalesan de.
called.together.IND.3P P

“And the generals did not lead them out, but called them together.”

上の (8) では、ボールド体になっている小辞 *men ... de* (on the one hand ... on the other hand) のほかに、文の一番はじめから数えて二番目にある下線部の *de* という小辞がある。これは、名詞句 (*h*)oi stratêgoi (the generals) の内部に割り込んでいるようにみえる。このような小辞の分布は上の (6) や (7) のような構造と相容れない。

Rivero and Terzi (1995) はその注 [15] の中で、本稿 (8) の下線部の小辞 *de* を sentential particle とは見做しておらず、本稿 (8) の冒頭の名詞句 (DP) を次のように分析している :

- (9) [_{DP} oi [_{WP} de [_{NP} stratêgoi]]] ...

一方、筆者が独自に調べた例に次のようなものがある⁴⁾ :

- (10) hoi gar epieikestatoi, hoon mallon axion
冠 小辞 最も正当な (人々が) 関係代名詞 よりよく 価値ある
phrontizein, heegeesontai auta houtoo peprakhthai,
注意を払う(不定詞) 信じるだろう これら このように 実行された(不定詞)
hoosper an prakhthee,
あたかも~のように 実行されるであろう

“For the most reasonable men, whose opinion is more worth considering, will think that things were done as they really will be done.”

(Plato, *Crito* 3)

上の用例 (10) では、ボールド体の *gar* は英語で言えば接続詞の *for* (前置詞の *for* ではない) に相当する小辞で、文全体を導く sentential particle である。にも

かかわらず、小辞 *gar* が冒頭の名詞句 *hoi ... epieikestatoi* (the most reasonable men) の中に割り込んだ形になっている。

4. 伝統文法における接語／小辞

伝統文法においては接語(*clitic*)の音韻論的な扱いが述べられている：

(11) a. 若干の短い語はそれ自身のアクセントをもたず、常にその前後の語と共に発音されるため、その前後の語にアクセントの点で依存している。

b. *Enclisis* 先行の語に依存する語を *vôcês encliticae, enclitica* (ἐγκλίνω《よりかかる》)という。これは一または二音節の語で、それ自身のアクセントを全く失うか、或いは先行語に *acutus* のアクセントを附与する。

(高津 (1960: § 11. 5.))

このように、接語に類する要素のうち、*enclisis* は左隣の語に音韻的に依存する。そのため、本来文頭に生じるべき語（例えば、文を導く接続詞など）であっても、*enclisis* であれば、文頭では左に依存すべき要素が存在せず、成り立たないことになる。次に、小辞 (*particle*) について見る：

(12) *Particulae* の中多くのものが *enclitica* であり、そのために文頭に立つことが出来ない。これらの *particulae* は従って文の第二番目の位置を取ることが多いが、これは印欧語共通基語以来の位置である。

(高津 (1960: § 322. 3.))

このような伝統文法の見解を見ると、小辞の分布が音韻論のレベルで決定されているという印象を受ける。ここで、(12) は次の節で見るヴァッカーナーゲルの法則と重なってくる。

5. ヴァッカーナーゲルの法則

Rivero and Terzi (1995) は、接語／小辞の分布に関連して、ヴァッカーナーゲルの法則に言及している。これは印欧語学者のヴァッカーナーゲル(Jacob Wackernagel) が 19 世紀末に提唱した説であり、Harris and Campbell (1995: 8.4.1.) によると、次のようにまとめられる：

- (13) a. 印欧語共通基語では強勢を持たない語は節の二番目の位置に配置されていた。
- b. サンスクリット語では、従属節内では動詞が強勢を持っていたが、主節では動詞が強勢を持っていなかった。
- c. 上の (13b) の特徴はゲルマン語にも当てはまり、以上の特徴がゲルマン語の定型第二位 (verb second) につながった。

上の古代ギリシア語の小辞の分布は (13a) が受け継がれたものと言える。つまり、古代ギリシア語の小辞が節の二番目の位置に生起することが、ドイツ語などの定型第二位と関連していると言える。

しかし、古代ギリシア語の小辞における第二番目というのと、ドイツ語定動詞における第二番目というのはニュアンスが異なるように筆者には思われる。ギリシア語の小辞とドイツ語の定動詞を(14a-b)の例で対比し、確認してみる⁵⁾。

(14) a. [En de_α tais heemerais ekeinai] paraginetai_β

中に 小辞 冠詞 日 あれらの 出現する

Iooannes ho baptisteos keerussoon en tee,

ヨハネが 冠詞 洗礼者 宣べ伝える-分詞 で 冠詞

ereemoo₁ tees Ioudaias

荒野 冠詞 ユダヤの

b. [Zu der Zeit] kam_γ Johannes der Täufer

に 冠詞 時 来た ヨハネが 冠詞 洗礼を行う者

und predigte in der Wüste von Judäa

そして 説教した で 冠詞 荒野 の ユダヤ

“IN the course of time John the Baptist appeared in the Judaeen wilderness, proclaiming this message: ...

(Matt. 3:1)

(14a-b) の文頭にはいずれも時を表す前置詞句が来ておりそれぞれ[]で囲んでおいた。(14b) のドイツ語では、その前置詞句全体を第一位として、その次の第二位の所 (下線部_γ) に定動詞の kam (came) が来ている。一方、(14a) のコイナー・ギリシア語では、時の前置詞句の次の第二位の位置 (下線部_β) には paraginetai (arrive (at)) という定動詞があり、小辞の位置は異なる。(14a) のギ

リシア語小辞は、文頭の時の前置詞句の中に割り込んでいる。つまり、ギリシア語の小辞が文の二番目といった場合、フレーズを考慮した数え方をするのはなく、単語を単位として二番目と数えるのである。

(13a-c) には通時的変化が作用しているであろうし、再分析 (reanalysis) なども、もしかすると影響しているかもしれない。二番目の位置と言っても、言語間で厳密に同じ位置を指し示すとは限らない⁶⁾。

6. 線形性と階層性

ここで線形性と階層性の違いが問題になる。周知の通り生成文法の最も基本的な原則として、「文法操作は構造に依存したものでなくてはならない」というものがある (Radford (1997: 1.6.))。例えば、(15a-a') を見て疑問文の倒置のルールを「文の二番目の語を最初の語の前に移せ」(同書 Ch.1(9)) のように仮定すると、(15b') のような誤った予測を行うことになってしまう：

- (15) a. Memories will fade away
- a'. Will memories fade away?
- b. Memories of happiness will fade away
- b'. *Of memories happiness will fade away?

(Radford (1997: 1.6.))

このようなことから見ても、ギリシア語の小辞が第二位に来るといふ原則は線形的な性質が強く、階層的な性質は弱い。

他の言語において、これといくらか類似しているケースがあるようだが、やはり Spell-out 以前のレベルだけで完全に捉えられる現象ではなさそうに見える。例えば、タガログ語において、代名詞の位置が構造的に指定されるのではなく、最初の単語の次という形で指定される例が報告されており、付加規則が適用されてから PF での規則が適用されたとする分析が提案されている (上山 (1987))。

7. まとめ

古代ギリシア語の小辞がいかに配置されるかについてのメカニズムは、階層的というよりは線形的、統語的というよりは音韻的な性格が強いように思われる。しかし、これは同時に語順の問題でもある。つまり、古代ギリシア語の小辞の位置の問題はある意味で統語論と音韻論の接点となる領域に属するとも言

えよう。

ギリシア語は語順が大変自由である（また、それと比較したドイツ語もある程度自由である）。確実な結論を得るためには、さらに exhaustive な調査が必要であろう。

註

- 1) 文字の転写、行間の注釈、英訳など、Rivero and Terzi (1995: (23-24)) による。
- 2) Taylor による文献は筆者は事情により未だ見ていない。
- 3) Xenophon, *Anabasis* 6.4.20 より引用。Rivero and Terzi (1995) において例文 (37)として引用されている例であり、転写、ポールド体、行間の注釈、英訳は同論考による。最初の de の下線は筆者による。
- 4) 転写、ポールド体は引用者（近松）による。英訳は Loeb 版の対訳から引用。
- 5) 聖書のギリシア語は古代ギリシア語よりも時代が下るが、小辞の分布に関しては大きな差異はないものとする。尚、例文 (14a) の転写、行間の注、[] や下線などは引用者（近松）によるものであり、英訳は *Revised English Bible*（末尾の例文出典を参照）による。
- 6) 例外的に小辞 de が文の三番目の位置に現れる例が Luke 3:1 の冒頭などに見られる。また、Rivero and Terzi (1995) の分析が比較的よく当てはまりそうな例もある。例えば、繰り返し現れるコイナー・ギリシア語の非人称構文の一つに、次のようなパターンがある：

(i) *egeneto* + (particle) + temporal phrase ...

これは、年代記的記述に多く見られるのではないかと思われる。文頭の *egeneto* は、英語の “It happened (that...)” などに相当する表現である。そのようなパターンは、例えば、Luke 2:1, Luke 5:1, Luke 6:1, Luke 8:1 などに見られるが、ドイツ語訳では通例、“Es begab sich...” と訳されている。このドイツ語の表現は文語的な用法としては「(出来事が) 起こる」という意味になる。このドイツ語は、時を表すフレーズを伴いつつ、文字どおりには (literally)、次のような形になっている：

(ii) expletive + *proceeded* + reflexive pronoun + temporal phrase ...

上の (ii) のドイツ語では虚辞の *es* が文頭に現れるのに対し、*pro-drop* の言語である (i) のコイナー・ギリシア語では動詞 *egeneto* が文頭に生起している。

例文出典

Die Bibel, Lutherbibel Standardausgabe, Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart, 1985.

Novum Testamentum Graece, ed. by Nestle-Aland, Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart, 1898/1979.

Revised English Bible with the Apocrypha, Oxford University Press and Cambridge University Press, 1989.

Plato I: Euthypharo, Apology, Crito, Phaedo, Phaedrus, ed. by H. N. Fowler, The Loeb Classical Library, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, and London, William Heinemann Ltd., 1914.

(Rivero and Terzi (1995) については、下の参考文献を参照されたい。)

参考文献

Chomsky, N. (1995). *Minimalist Program*, Cambridge Massachusetts, MIT Press.

Harris, A.C. and L. Campbell (1995). *Historical Syntax in Cross-linguistic Perspective*, Cambridge, Cambridge University Press.

Radford, A. (1997). *Syntactic theory and the structure of English: A minimalist approach*, Cambridge, Cambridge University Press.

Rivero, M. L. and A. Terzi (1995). Imperatives, V-movement and Logical Mood. *Journal of Linguistics*, 31, 301-332.

Rizzi, L. (1990). Speculations on Verb Second. in J. Mascaró, and M. Nespó (eds.) (1990), *Grammar in Progress*, Dordrecht, Foris, 375-386.

上山 あゆみ (1987). 「タガログ語の代名詞移動について —GB 理論による説明—」, 日本語学会 第 95 回大会研究発表.

小野 隆啓 (1999). 「機能範疇主要部の語彙化と普遍文法 —ドイツ語統語論への一試み—」, *SELL*, 15, pp.25-52, 京都外国語大学英米語学科研究会.

高津 春繁 (1960). 『ギリシア語文法』, 東京, 岩波書店.

田中 美知太郎, 松平 千秋 (1968). 『ギリシア語文法』, 東京, 岩波書店.